

光り輝く未来の夢を見る  
大切な人が笑顔で  
天寿を全うするその日まで  
幸せに暮らせるよう

決してそのいのちが  
理不尽に脅かされることのないよう 願う

たとえその時自分が  
傍にいられなくても 生き抜いて欲しい

ただひたすら平和な  
何の変哲もない日々が  
いつまでもいつまでも 続きますように

生きていることはそれだけで奇跡

あなたは尊い人です  
大切な人です

精一杯生きてください



令和  
迎春  
三年

何百年も前の出来事も、その時は今でした。今の出来事もまた何十年何百年経つと昔話です。(中略) そしてまた自分も、大きな流れの中で同じように、苦しいことつらいことを乗り越えて年を重ねていきます。もうだめだ、と思った瞬間こそが、道を踏み外さないように踏ん張る時です。困難な状況や苦しい境遇に負けないで欲しいです。

ジャンプコミックス「鬼滅の刃」吾峠呼世晴作 第23巻 作者あとがきより

◆残酷なシーンもあるが、流麗な描画と迫真な声優の演技、効果的な音楽によるアニメーションで火が付き、社会現象ともなった漫画の舞台は大正時代初期。ほぼ百年前の大正七〜九年にかけて世界を襲ったスペイン風邪では、日本でも四五万人が犠牲になったと言われる。

寺院の過去帳を調べてみると、確かにこの年の百回忌はほかの年に比べて二、三割程度多く、当時第一波の七年十一月には突出している。歴史上は、奈良・天平年間、東大寺大仏建立の要因ともいわれ、自然がもたらす災厄(天然痘患者が赤鬼とも?)には、天皇の改元のほか、巫女や僧侶らの加持祈祷に頼る歴史が長く続いた。

この漫画の第一話冒頭も「なんでこんなことになったんだ」「兄ちゃんが助けてやる、絶対に死なせない」という場面から始まる。妹・禰豆子を人間に戻すため、炭焼き一家の長男だった主人公・炭治郎は、否応なしに平凡な生活を捨て、鬼狩りへと戦いの道に身を投じる。

そこには超常的パワーアップや奇跡的展開はほぼなく、愚直なまでの努力鍛錬と、自ら頭を使って戦況を見極め対処法を絞り出すしかない。まるで今私たちが晒されている感染症有事の有様に符合するかのようだ。

◆人を食う鬼たちと鬼殺隊剣士らの戦いを通じて繰り広げらるるの、単なる勧善懲悪ではない。両者のキャラそれぞれの背景を通じて、人間の業とも呼ぶべき姿とその和解、「想い」を共有し継承していくことが描かれる。

その意味では、この作品には仏法と親和性も高い部分も少なくない(拙寺二〇二〇年十一月の掲示も参照)。たとえば、第一話の時点で主人公が「人生は移ろってゆく。ずっと晴れ続けることも雪が降り続けることもない」と言い、自然の道理を受け入れている。

一方、鬼は特殊な刀で首を切断するか、日光に当たらない限り体の欠損も再生し、無限の生に執着する。鬼の始祖が配下を増やし絶対服従させるのも、己の不死が最終目的だ。対して鬼殺隊の現統率者は九七代目。病弱ながら皆に敬愛され、自らを囷にして始祖に打撃を与え、若い剣士や後継者に後を託す。明快な対比だ。

また、剣士の能力を格段に高める種々の呼吸法が登場するが、ヨーガや座禅でも息の操作技術は基本かつ奥義であり、深い瞑想・集中状態に入れば心身が変容する。

◆さらにこの作品の大きな特色は、鬼のみならず鬼殺隊

も通常の人間社会とは異質な集団であること。両者とも、それぞれ幼少期に深いトラウマ的体験を抱え、屈折した属性を持つ。そして死に際か死に瀕した状況で、走馬灯のように親兄弟らが現れ、本人の病理が癒されてゆく。その因縁とは、捨て子や盲人、人身売買に花魁、親兄弟や周囲からの無理解に虐待、村八分など過酷な境遇だ。ここにおいては健康者と病者の明確な境界はない。鬼たる浅ましきは誰にも潜在する。しかしそれらのグレイゾーンこそ、娑婆世界を生きる現実ではないか。

唯一主人公のみ、純粹無垢な精神の持ち主である。倒した鬼に「どうか、この人が今度生まれて来るときは、鬼になりませんように」と弔い、「鬼も俺と同じ人間だったんだから」と悲しみを寄せる。彼自身が表す包容力やコミカルさが、物語全体を通底する救いだ。

もともと「鬼」とは「隠」が語源ともいわれ、人が抱える宿業や闇の心を示唆すると同時に、人里から離れて山中に暮らしたような狩猟採集や漂泊の民、被差別民や反体制者、盗賊などと歴史的に形成されてきた。

平安から鎌倉への動乱期、親鸞聖人は「屠沽の下類」とさげすまれる人々に対し、「みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」と、仏の救済対象を転換する。また「さるべき業縁の催せば、如何なる振舞いもすべし」と、縁次第で誰もが加害者になりつると諭した。

◆大きな犠牲とともに、長く壮絶な戦いの物語が終結する。ラスボスの執念で鬼化しそうな主人公が、生き残る同志と亡くなった仲間の手で人に戻る場面が印象深い。

ラストでは、片目片腕を損ねた主人公と、ともに戦った仲間たちが平穏な日々を楽しみ、世の脚光も浴びることなく柔らかな笑顔で描かれ、ついほっとしてしまふ。

添えられた台詞は、遣された人への普遍的な祈りのように沁みてくる。剣士たちの遺書のようにでもあり、主人公の想いでもあり、作者自身のメッセージにも違いない。

人生は不条理に満ち、誰も皆有限な生を終えて往くからこそ、真実なものをどこかに求める。自然も、生老病死も、他者も決して己の思い通りにならない。しかし他のいのちが輝かしく幸せであればただ願うことが、この生を閉じていく意味・覚悟を支えるのではないか。いかなる人生をも尊厳を持って全うさせると、如来の願いが慈悲となって働いている。我執を超えていく大きな物語が、人を人たらしめるはずだ。(文責:報恩寺 林 暁)